

体験版

箱女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

審議の結果、もう続きは書かないと決めたものになります。ただそのまま消してしまうのは残念なため、こうしてまとめすることにしました。

目次

アイドルマスターシンデレラガールズ

小関麗奈が上り詰める話 01 | 1

小関麗奈が上り詰める話 02 | 8

小関麗奈が上り詰める話 03 | 16

咲 | s a k i |

龍門 洵透華の手記 | 20

T I S T A

T I S T ∇ 0 1 | 25

T I S T ∇ 0 2 | 38

アイドルマスターシンデレラガールズ

小関麗奈が上り詰める話01

...

リップで滑らかに光る唇からこぼれる息は、転んでもケガをしないようにと敷き詰められたタイルカーペットに色彩としての遊びが感じられないことから来るものだった。壁がダークブラウンのシックな木材をメインとしているのだからそれに合わせて床材を決めたほうがよかったのではとも思うのだが、なんだかんだともう見慣れてしまっているこの光景が愛おしくもあり、また同時に全的に肯定できない部分を持つてもいるのが彼女には少しだけ面白いようだった。

とくに何の用事もない階の廊下をふらふらと歩いているのは、なにか自身の興味を引くものはないかというわがままな探求心ゆえのことだ。何かが見つかればそれでよし、何も見つからなければそれはそれでまあよし、という愉快な考えとついでにゴキゲンな鼻歌とともに彼女は歩いていった。しかし本人曰く鋭すぎて未来予知と変わらないかも、などという評価を与えられているセンサーによると、この廊下でじきに面白いものが見つかるのだという。

瞬間、わずかに空気が震えた。彼女以外には動くものも音を発するものもないため、いま彼女は外的な変化に対してこれ以上なく鋭敏だ。もうすぐ目に見える変化が訪れることを察して、作り物のように大きくて綺麗な目がいつそう開かれる。ほとんど同時に曲がり角の先のレスナールームの扉が勢いよく開いた音がして、直後によくよく見慣れた人物が姿を見せた。しかし様子は見慣れたものとは似ても似つかない。すくなくとも全力ダッシュでエレベーターではなく階段を目指すような姿となると想像すらしたことないと言い切つていい。それも女の子を小脇に抱えた上でとなればなおさらだ。

「……………わーお、職場で誘拐？」

せつかくだから何をしているのか話を聞いてみたかったが、一瞬の

うちに駆け抜けて行ってしまったために彼女はひとりでぽつりと眩くことしかできなかつた。それでもどこかに気に入った要素を認めただのか、次の瞬間には機嫌良さそうに顔をほころばせて再び鼻歌を歌い始めていた。

...

「木場さんっ！　いますか木場さん！」

「……だいぶ混乱しているようだが？」

息は切れ切れ、汗はだくだくの見るに堪えない姿でドアをノックもなしに叩き開けて乗り込んできた男に対して、木場さん、と呼ばれた女性は目を大きくしただけで実に冷静に対応した。彼女がいるのはDルーム、と名付けられた実質的には彼女のための作業ルームである。男が問答無用でドアを叩き開けることができた理由もそこにある。

飲もうとして持ち上げていたカップをもう一度口元まで持つていつて傾け、ふう、とひとつ息をつく。その仕草からは余裕がありありと見て取れる。もしかすると人が駆け込んでくるというのが日常化しているのかもしれない。

「そろそろ！　下ろしなさいッ！　あとなんでもいいから言及しろッ！」

「だそうだが？」

男に抱えられながらじたばたと暴れていた少女は、ようやくその両足を床に下ろして安堵のため息を零した。下ろされたあとに少女は男から二言三言ほど聞いて、それ以降は口を開かなかつた。一方で抱えられながらさんざん暴れたせい、長い髪は端にいくほどぼさぼさになり、着衣も変な方向によじれている部分が見られる。着てて気持ち悪いのだろう、少女はいそいそと服の乱れを整えていく。

少女が服装を直しているあいだに　「木場さん」　は男に視線をちらと送つたが、彼は視線を合わせて頷くだけで何も言わない。ただコーヒーの香りだけが、唯一の刺激として部屋の中に残つた。

わずかにあつて身だしなみを整え終えた少女が腕を組んだ。見たところの年齢からするとあまり縁があるポーズには思えないのだが、妙にその仕草が堂に入っているのが不思議な感じを与える。栗色と呼べるほどには明るくない茶髪は、長いがボリウムがあるというわけではなく、重苦しい印象はない。額を強調するように前髪は短いところで遊んでいる。垂れ目気味で眉ははつきりと薄い。鼻は控えめで、ポーズに合わせるように口角は上がっている。抱えられていたときに暴れていたことは頭から吹き飛んでしまったのかと思えるほどに得意げな態度を取っている。

「じゃあ改めて。突然乗り込んで申し訳ありません、木場さん。この子は小関麗奈。次の――」

「アイドル候補、というわけか」

男のセリフを食った彼女は、なるほどねえ、と小関麗奈と呼ばれた少女をしげしげと眺める。顔の造りは見事に整っている。ただ一方で一般的な意味での美少女という言葉のイメージとぴたりと合致するわけではない。近い将来に美人と評されることが確約されていると評したほうが近い。そんな少女の姿を見ても、「木場さん」は特別な反応を見せない。わずかに口の端を上げて微笑むだけだった。その視線に小関麗奈と呼ばれた少女はさっきの得意げな態度とはうってかわつてすこし居心地悪そうな表情を浮かべている。

「あ、いや、……いえ、そうです」

「プロデューサーであるキミが連れてるんだから、まあそういうことなんだろうさ」

彼女は右腕を広げて、大げさに二度ほど頷いた。

「ただ気になるのは、どうしてその子をここに連れてきた？ まだ資料も回ってきていないぞ」

「資料なんてまだ作ってませんからね、まだ麗奈はこつち来て二日目ですよ」

性別を問わずカツコイイと評判の「木場さん」が呆けたように口を開けている。あるいは貴重なワンシーンなのかもしれないが、そのシーンは長くは続かなかつた。悩ましげに目を閉じて、指でこめ

かみを叩く。彼の言ったことに理解が及んでいないのは誰の目にも明らかだった。

「つまり、まだロクにレッスンも受けていないのにこのレコーディングスタジオに連れてきたということでもいいのかい？」

「いえ、木場さんに会わせる必要があると思っただから、です」

「……いまひとつ言いたいことがわからないな。ふつう私に会わせることが最優先の目的にはならないはずだろう。その子の前提条件を聞けばなおさらだ」

お手上げだ、というふうには彼女はかぶりを振った。何をしてもサマになるその姿は、先ほど彼女の口から出た存在を想起させる。あるいはその枠に収まりきらない存在かもしれない。しかし彼女はこのスタジオのスタッフであり、それ以上の存在ではない。そのことを嘆いている関係者の数は相当いるという噂だがこれはまた別の話である。

降参した彼女の仕草を見て取った男はちよつとだけ申し訳なさそうに頬をかけた。どうあつても言葉で説明する気はないらしい。あるいは説明できない類のことなのかもしれないが、それすら言ってくれないのでは判断のしようもない。『木場さん』と男の視線が再びぶつかり、男は先ほど叩き開けたドアを開けて彼女に部屋を出るように目で促した。少女はいつの間にか興味津々といった様子でDルームのあちらこちらに視線を飛ばしていた。腕は組まれたままだ。

男が廊下を先導して進む。礼儀として『木場さん』に先に部屋から出てもらったものの、彼女は彼が何をしたいのかがわからないのだから行き先もわかりようがなく、その構図になるのは自然なことだった。少女は好奇心を抑えきれなかったようで、腕組みなんて忘れていゝろんなところをしげしげと眺めまわしている。来た時には小脇に抱えられて余裕がなかったことを思えばある意味当然なのかもしれない。

部屋から出てそこまで歩かないうちに男の足が止まり、そこに用があることを態度だけで示した。もちろん彼女はこのスタジオのスタッフなのだからその部屋の用途はわかっている。そもそもレコー

ディングスタジオにそれほどたくさん用途があるわけでもない。

「なあ、たしかにここはスタジオだから基本的にできることと言ったらこれだけだ。ただ確認だけはしないとならない。キミは私が考えていることを本当にやろうというのかい？」

ひとつ頷いて男は少女を、ちょうど囚人との面会に使う部屋のように二分された向こう側へとつながる扉へ連れて行く。こちら側とあちら側は扉の要素を除けばきちんと仕切られている。一般的な窓の高さより少し低いくらいの位置から上はすべて防音ガラスになっており、その部屋の壁に埋め込まれた技術と合わせてあちら側の音をこちら側へまったく届けない造りになっている。あちらとこちらを結ぶのは、扉とマイクを通した声だけだ。

ガラスの向こうでは、少女がヘッドホンの引っ掛けられている日常ではあまり見ることのないタイプのマイクと譜面台を怪訝な表情で見つめている。少女がひとりで歌うには明らかに広すぎるスペースもその表情の一因になっているようだった。こちら側には一見しただけでは何がどう作用するのかわからないツマミがいくつもついたデスクとヘッドホン、やはり専門性を伴う機材が整然と並んでいる。

思考を続けるもいまだに最終的な目的がつかめずに慥然とした表情になりかけている。『木場さん』の隣で、男はデスクから伸びているマイクに向かって小関麗奈と紹介された少女に指示を飛ばしている。少女は言われるがままにヘッドホンを手に取るもどちらが前なのかわからないようで、傍から見ていると微笑ましくなるほど手間取っていた。

やっと準備を整えたようで、少女は奇妙なかたちのマイクの前に立った。その顔に目をやると、抱えられていた時のコミカルな表情でも立ち直ったあとの得意げな顔つきでもない。焦りも緊張もない。そこにあるものに対して別に何も間違っていないと思っっているような、自然な表情だけがそこにあった。決して縮こまらず、ガラスの向こうの風景に小関麗奈はびったりと馴染んでいた。

「じゃあ麗奈、このあいだの歌をもういちど頼むよ」

「はいはいわかったわよ、まったく、いったいなんだったのよ……」

USBメモリをデスクに挿して男がキーボードを操作すると、少女のヘッドホンにイントロが流れ始める。いつの間にか男も　〃木場さん〃　もヘッドホンを耳に当てていた。男はきちんと装着し、〃木場さん〃　はヘッドホンを手に持って左耳に当てているだけ、という違いはあるが。

イントロが終わって、少女のすつと口が開いた。

・・・

片耳に当てられていただけのヘッドホンは、少女が歌い終わるころにはしっかりと装着されて、さらに上から両手で押さえつけられていた。そこから流れてくるものを一粒も聴き逃したくないと彼女が思っていることが言葉で説明するよりもはるかに伝わってくる。目は見開かれ、口は閉じることを忘れられていた。度肝を抜かれたという言葉がぴたりと嵌まる顔をしていた。

「……なあ、本当なのかい。レッスンを受けていない、のか？　これだ？」

きれぎれに言葉をつなぐ　〃木場さん〃　の様子を知ってか知らずか、歌い終えた少女があちら側の部屋から戻ってきた。特別なことをしたというような様子はなく、どちらかといえばそんなことよりもさつきまでいた部屋にある初めて見たタイプのマイクが気になっていようだった。少女がまだ子供であることを差し引いても、ほとんどの人はその人生でノイズを取り払う機材のついたマイクを見ることはないのだから自然といえば自然だろう。

不意にマイクから意識を切って、少女がまだ呆然としている　〃木場さん〃　のほうを向いた。

「さて、これでやっとアイサツができるわね。さつき聞いたと思うけどアタシの名前は小関麗奈。それで、アンタはいったい何者なのかしら」

「あ、ああ、木場真奈美という。このスタジオのスタッフだ、よろしく頼む」

「ふうん、マナミね。覚えてわ」

そう言うのと麗奈はにいつと口の端を上げた。種類で言えば、たとえばアイドルが浮かべるような笑みとは似ても似つかない。はつきり言って男や真奈美のような大人から見ると小生意気といった程度で
“可愛らしい” の範疇に収まりはするのだが、それでも分類する
ならからうじて邪悪な笑みだった。何に納得したのかは本人に聞いて
みなければわからないが、真奈美がひとつ頷いた。

しかし直後に彼女の眉根にはしわが寄った。アイドルとして活躍
していくために矯正するべき点と強調していくべき点を見定めるの
はそれこそプロデューサーの仕事に違いない。扉を叩き開けて入っ
てきたときの様子を鑑みれば同僚に相談をしていないだろうことも
簡単に想像がつく。真奈美が思考の海に沈もうとした矢先に、それを
制するように男が声をかけた。

「木場さん、共犯者になるつもりはありませんか？」

「……何やら物騒な単語が耳に入ったが、それはこの子に関係するこ
とと判断していいのかな？」

「もちろんです。これは麗奈にしかできませんから」

「……乗った。詳しいことはまた後で聞かせてくれればそれで構わな
い」

声色と感情がまったく一致しない奇妙な会話だった。どちらも表
情ひとつ崩していないが、まず間違いなく何かが含まれている。自己
紹介をしたきり蚊帳の外に置かれていた麗奈は二人の会話に出てき
た単語を聞いてぎよつとしていた。

「誘った俺が言うのも何ですけど、そんな即決でいいんですか？」

「小関麗奈という才能に興味が湧いた。それで十分だろう？」

厳密には違うのかもしれないが、大筋ではこの瞬間がプロジェクト
成立の瞬間だった。

小関麗奈が上り詰める話02

・
・
・

輿水幸子はアイドルである。

同業の中でもひとときわ輝く存在で、たとえば彼女の名前ひとつでテレビ番組の視聴率をある程度左右するくらいには売れっ子である。そんな幸子は信頼するプロデューサーに呼び出されて、いま二人だけで話すには広すぎる会議室で待ちぼうけを食っていた。

こんな経験は別に珍しくない。それほど特別でない話、その中にはもちろん仕事の話も含まれる、であるのなら彼が普段から詰めている執務室や、あるいは状況が許せばその辺の廊下で話せばよいことだが、そうでないということはそれなりに特別な話であると判断してよさそうだ。まさか話をする場所が変わったくらいでいまさら緊張するわけもなく、幸子はなんとなく自分の爪をしげしげと眺めていた。

棲んでいる業界の影響もあつて、幸子は待つのに慣れていた。約束の時間を過ぎるのはやっぱりよろしくはないと思っているがそれでもどうしようもないことがよく起きるのがこの業界で、いま自分のプロデューサーが遅刻していることに対しても彼女は一言たしなめる程度で済ませるつもりでいた。

「いや、すまん幸子。思ったよりも時間食っちゃまった」

がちやり、と控えめな音がして、申し訳なさそうな表情と頭の後ろに手をやりながら入ってきた男が敏腕だとは誰も思わないだろうなあ、と幸子は心の中でこっそりため息をつく。人は見た目によらないとはよく言うが、どこを切り取っても普通以外の形容が見つからない彼は、そもそもその見た目を憶えてもらえないのではないかとすら思える。

「まったく、お仕事とはいえ女の子との約束の時間に遅れるのはいけませんよ？ プロデューサーさん。ボクくらい寛容でなければ許してもらえませんからね」

「面目ない。言い訳も思いつかないよ」

「それで、わざわざごっこち借りて話をするなんてどうしたんですか」

その理由が半ば以上わかっていいると思っっているからだろう、幸子の態度には純粹な疑問のなかに得意げな様子がうっすらと滲んでいた。たしかに気質的な部分もあったのかもしれないが、それをかたちづくっているのは年齢のわりに聡いところと年相応の幼さが混じりあつたある種のいびつなパーソナリティと言い切つてしまつてもよさそうだ。いかに世間に浸透したアイドルとはいつても中学生であることに変わりはない。そこには期待のような光が明滅していた。

「他の誰かに聞かれたらマズいからだな。まあ百歩譲つてフレデリカまでだ」

「……あれ？　もしかしてボクの大きなお仕事の話じゃなかったりします？」

「すまん、それは別口で取ってくる」

「じゃあ本当にどうしたつて言うんですか、フレデリカさんとボクまでにはしか明かせない秘密の話だなんてボクにはちつとも思いつきませんよ」

「そうむくれるな。実はある計画のために幸子の協力が欠かせなくてな、それを頼みにきた」

すこし前にちよっぴり不機嫌になつた幸子の顔が訝しげなものに変わった。

...

「正気ですか？」

「正気もなにもないさ、考えてることをやり通そうと思つたらこうするしかなかったつてだけ」

「……はあ、そんなんだから上層部の方から煙たがられるんですからね？」

「はっはっは」

行儀よく座つていたはずの幸子は、気が付けば男に引きずられるように脚の短く幅の広い長机に乗り出すような姿勢に変わつていた。

他には誰も見ていないし聞いていないとわかっているのに、秘密の話というものにはそういう一風変わった魔力のようなものがあるのかもしれない。

待っている時には綺麗だった姿勢が話を聞く段になって前傾になり、話が終わつたと判断するや弾かれるようにその身を革張りのソファの背もたれに預けた。顔を動かさずに目だけを動かして視線を窓のほうに向ける。輿水幸子が物事を考える際のクセだ。男は自分の膝の上に肘を置いたまま体勢を維持している。どうも急ぎの用事は控えていないらしい。

「……協力者はどなたですか」

幸子のその言葉を聞いて男はにっこりと笑った。

「なるべく数は少なくしたいと思ってる。俺と幸子、あと木場さんはもうこっち側だ」

「……言っておいて何ですが犯罪行為みたいに聞こえますね、これ」
「それと絶対に必要なのが千川さんだ。ここは俺と木場さん二人でかかるよ」

「ちひろさんまで抱き込むつもりなら、いつソフレデリカさんも初めから声をかけておいたほうがよくありませんか？ やっぱり身近なところに外部を作ってしまうのは上策とは思えませんし」

「……なるほど、お前の言うとおりかもしれないな」

男は顎の先端に手をやって、ほんの短いあいだけ思案した。身を預ければ簡単には体を起こせなくなるおそろしく懐の深いソファに浅く座って考えている様子は、控えめに言っただけ悪巧みをしているようにしか見えなかった。一方で幸子はソファに深く身を沈めており、彼女の小さな体躯だと見方によってはソファに吸い込まれている途中だと誤解したくなるような姿だった。姿勢こそ違えど同じ方向に頭を働かせているのは確実に、無言の時間にもはつきりとした意味があった。

ほどなくして同年代から見ても小さな少女がふたたび口を開く。

「人数規模がまだわかりませんが情報が共有は徹底したほうがよさそうですね。規模はどうしても膨らむでしょうし、関係者とそれ以外の

線引きははつきりしてないと厳しいと思います」

「はっは、幸子もこういう話が得意になったな」

「笑い事じゃありませんよ、ボクはこんなへんてこりんな経験なんて重ねたいわけじゃないんですからね」

ぷりぷり怒るような態度を取るがそれが本心でないことはお互いわかっていた。そしてこの場で詰めておくべきことももう無いと理解していた。輿水幸子は男を信頼していて、聴く、だからこそ油断はなかった。今日この日なんかよりもよほど大変な時が来ることは、幸子にとって一月の次は二月だということくらいに自明だった。

「まあまあ、これも何かの役に立つ日が来るさ。それじゃあ幸子、頼んだよ」

返事の代わりにおどけた顔でため息を返すと男は満足そうに頷いた。絶対にファンの前では見られない顔だった。それこそ本人に言わせれば “カワイくない” と断言するだろう。それはプロデューサーと呼ばれる男のある種の特権なのかもしれないが、いったい何をどうすれば輿水幸子がそういう態度を取るまでになるのかは誰にもわからないことだった。

・・・

「ええと、そうですねえ、あと注意しなきゃいけないのは学校のお友達はここへは呼んではいけないこと、ですか。どれだけ仲の良い方でもルール違反になりますので控えてくださいね」

一見すると書棚や机、デツキなどを除いた家具が暖色系で統一されたマンションの一室に見える空間に、輿水幸子と小関麗奈が向かい合って座っていた。テレビもコンポも置いてあり、それこそ居間に揃ってほしい品々がシンプルに思いつく限りは揃っているように思える。ただ、そこがどうしても一般的と言えないのは、部屋の広さが一室としては尋常ではないものだったからだ。

さすがに椅子やソファの数が足りるわけではないが、人が入るだけならそれこそ数十人単位で過ごすことが可能な広さは山形から出て

きたばかりの少女を圧倒するのにじゆうぶんなものを持っていた。いま二人が陣取っているのは角度的な問題でテレビも見えない部屋の隅の一角で、出入り口が三つほどある部屋自体にはさきほどから人の往来が見られる。

「まあ、大雑把には理解したわ」

「たしかに口で言うだけで理解できるようなものじゃないですからね、生活していくうえで慣れていってください。それでは何か質問はありますか？」

「そうね……、けっこう部屋の数あるみたいだけど、どうして二人一部屋なの？」

「麗奈さんの言うとおり部屋の数は多いんですけどやっぱり限りがあるのがひとつですね。それと大学生みたいな大人の方なら問題ありませんが、ボクたちみたいな、あるいはそれよりもっと小さな世代だと自室にいるときにずっと一人っていうのは精神的に不健康になる可能性もありますし。家族以外がいるっていうのはすこし大変かもしれないませんが、一長一短だと思いますよ」

「……アンタのことテレビでよく見るけど、ド丁寧なしゃべり方って素なのね」

「そんなに丁寧ですか？ ボクにとってはこれが普通なんですけど」

きよとんとした表情の幸子の言葉を承けてほんの少し間が空くと、麗奈はなにかに納得したように頷いた。いま麗奈は部屋の中央を背にして、壁を向いたソファに座っている。対面に座る幸子が部屋の広いほうを見渡せるかたちだ。麗奈は何の気なしに具合のいいソファに腰かけているが、実態はそれほど単純なものではない。輿水幸子は話を始める前の段階から気を配らなければならなかった。なぜならそんなことを気にしなければならぬほどにこの寮が異常だからだ。

「まあいいわ、それでアタシの部屋はどこなのかしら」

「あっちの廊下の真ん中辺りですね、さっきも言いましたけどボクと一緒にの部屋です」

それだけ言うと幸子は立ち上がり、ではそろそろ行きましようかと、と向かいのソファに座っていた麗奈に手を差し伸べた。何も言わず

に麗奈もその手をとって立ち上がった。普段からぱっちりしているとは言い難い目をさらに緩ませて、幸子はこれから向かう先を手で示した。

振り返って確認する前から広間に人の往来のあることくらいは麗奈にもわかっていた。幸子との話の途中に別の話し声が聞こえてきていたからだ。深く考えることもなくここは寮の広間なのだからそれは当然で、ある限定的な事実を除けばこの場にはとくにおかしいところはどこにもない。幸子と話をする中でちよつとだけ緊張状態がほぐれたのか、麗奈は適当に周囲を見渡すと、あつ、と目を丸くした。「どうかしましたか」

「……あれって、塩見周子に速水奏よね？ よく見れば他にもテレビで見たのが……」

「それはそうですよ、ここはアイドルの寮なんですから」

もちろん広間には麗奈と幸子が座っていたソファの他にもソファやテーブルが置いてあって、そこではテレビや雑誌でよく見かけるアイドルが気ままに過ごしている。冷静になれば麗奈も一度も見たことがないと気付ける人物もいるのだが、知っている存在に優先的に目がいってしまうことと見たことがなくてもアイドルと言われれば納得してしまう外見をしている女性や少女ばかりであることが些細な違いに彼女の目を向けさせなかった。

急に動きがぎこちなくなつた麗奈と周囲のアイドルたちに会釈をしながら歩く幸子の姿はどうにも不釣り合いな感じが否めなかった。身長で言えば麗奈のほうが大きいのだが、立ち居振舞いを通すとそんなふうには決して見えなかった。

「麗奈さんも今日からここの住人なんですし、気後れしなくても大丈夫ですよ」

「じよ、上等じゃない。何日かあれば十分よ」

ホテルをイメージしたくなるような長さの廊下を歩いているあいだ、幸子だけでなく初めて見る顔に興味を持ったアイドルたちも麗奈に声をかけていったのだが、そのほとんどを彼女は覚えていなかった。いくつか返事をしたような記憶がぼんやりとあるだけで、誰に何

を言ったかは見事に頭から抜け落ちている。足取りがしつかりしていたことが数少ない救いだっただろう。

廊下の壁と各部屋につながるドアは一直線上にあるわけではなく、部屋の構造の関係もあって、ドアは廊下をすこしへこませたところにあった。ちょうどホテルの部屋のようにドアには部屋番号が書かれたプレートがくっついている。

ドアを開けて気にも留めないほどの長さの廊下を抜けるとまず目につくのは二段ベッドだ。知識はあってもなかなか見ることのない梯子で上に上がるタイプのもので、上にも下にも寝返りでの落下防止用の柵が備え付けられている。やさしい色合いの木の素材に質の良さそうな薄手の掛け布団とタオルケットが丁寧に畳まれているのが見える。入ってすぐ左手には本棚、そこにくっつくように二段ベッドが置かれている。枕の位置を本棚よりにすればベッドから手を伸ばしてそのまま本を取ることもできるだろう。入って右手にはクロージェットがふたつ並んでいる。当然ながらそれぞれ片方を使うのだろう。他にもぎつと見て姿見やあまり大きくはないタンスなどが目に入る。中央には脚の短い丸テーブルがあって、パステルな色合いのクッションが明らかに二人ぶんよりは多く転がっている。アイドル仲間が訪ねてきたときのためのものなのだろう。食事やら何やらを共同スペースで済ませると考えれば二人ぶんのルームシェアとして納得できるワンルームである。

丸テーブルの近くのクッションをひとつ取って麗奈に手渡すと、幸子もクッションの上に座り込んだ。さすがに自室ということである程度油断しているのか、正座から両足を左に崩したような格好で座っている。

「さて、じゃあここからが本題なんですけど、ってどうぞどうぞ、座ってください」

「本題？」

「まず大前提としてボクは麗奈さんの味方です。そのうえで聞きますけど、プロデューサーさんからどこまで聞いてますか」

「アタシはアンタと同じ部屋になるからいろいろ頼れって言われただ

「けなんだけど」

「ん？ えーと、えー、もしかしてですけど、デビューに関わる話とか聞いてない感じですか」

「なんか 『伝説作るぞ』 とか言われてそれっきりだけど」

応援しているサッカーチームのエースがペナルティキックを思いきり外したときのように、幸子は額に手をやってこれ以上ないというほどのため息をついた。もちろんのことただ事実を話しただけの麗奈に罪はないが、それでもなんだか気の毒になってくるほど深いリアクションだった。

小関麗奈が上り詰める話03

・
・
・

それは麗奈がレッスルームから拉致をされ、幸子から寮についての説明を受けた翌日のこと。

監獄を思わせる実務性にも目を向けた室内には、おびただし数の資料が詰め込まれたいくつもの棚とシンブルな事務机。ぱつと見たところでは華やかに映る芸能界に關係するところには思えないだろう。机の上にはプリントアウトされた資料が乱雑に散っている。換気が悪いせいですこしほこりっぽいこの部屋の主は、頭痛に襲われたように机に肘をついて額に手をやっていた。

机に伸びた上腕に彼女の編まれた長い髪が這っている。ココアのように暖かい色合いをしているのに加えてあまり丁寧に編まれていないせいで、きちつとした印象よりも穏やかな印象を残すものになっている。よく勘違いされているのだが、彼女の髪の編み方は実は三つ編みではなく厳密にはフィッシュボーンと呼ばれているものである。しかし彼女はいちいちそれを訂正しないことに決めている。別に重要なことだと考えていないからだ。本当に頭痛でもしているのか彼女の顔色はあまり優れないようで、眉間にしわを寄せて難しい顔をしている。ここは基本的には誰も立ち入らない彼女だけの王国。だから彼女は外を歩いているときどころか社内ですら見せない表情を気兼ねなく披露することができる。ここは彼女だけの王国。する必要がないのだから色合いのことなどまるで考慮されていない資料室にまったくそぐわない若草色の事務服のはずなのに、妙にその女性の姿は風景にぴたりと嵌まり込んでいた。

たん、たん、たん、と不規則なリズムで彼女の指が机を叩く。相変わらず左手は額に当てられたままだ。機嫌の悪そうな表情も変わらない。その姿はある事柄について考えることがあるというよりも、すでに結論が出ているのにそれを素直には飲み込みたくないというようになものに見えた。

「なまじつか実現できちゃいそうな気がするのがよくありませんよねえ……」

彼女はそうひとりごちてスマートフォンを取り出すと慣れた様子で指を動かし、大きなため息をついた。SNSとは便利なもので、きちんと使えば一対一だけでなく特定の集団にのみ秘密裏に接触を図ることができるものである。彼女はそのグループに「グループ3」などというなんとも素っ気ない名前をつけたが、これは彼女なりの隠蔽工作であった。もちろん自分のスマートフォンを覗かせるつもりなどカケラもないが、それでも漏れてはいけない情報というもの的重要性を彼女はしっかりと理解している。ましてやあの男とあの木場真奈美に内緒だと念を押されたのだから、隠さなければならぬところは意地でも隠し通さねばなるまい。

もう一度ため息をついて、彼女は自分が頼まれたことを頭の中で繰り返す。それ自体は非常に簡単なことで、二人から話を聞いたときにはむしろ拍子抜けしたほどだった。近いうちに時間をとって計画の詳細を教えるとは言ってもらえたが、逆に考えれば短時間では説明しきれないレベルの話であるということでもあって、そこに不安が残るのは当たり前のことだった。

「……それにしても早矢さんは真奈美さんを引っ張ってきましたか。……なんというかもはやズルと言ってもいいような気がしますが大正解ですね、真奈美さんにあそこまで言わせるなんて興味が湧かないわけがないですし」

ぶつぶつ呟きながらその小関麗奈という少女の資料について考えを巡らせている途中で、はた、と彼女の思考が停止した。ついで、あーあーなるほどなるほど、とやさぐれたように口を開いた。

（資料の段階でごまかせてことですか。慎重というかこすいというか……。しかしそうなると風除けを誰に、ああいや、他に選択肢がないのか。たぶん今西部長に話は通してると思いますが、念のため確認は必要ですね。……それにしてもこの行動を読まれてる感じはイラツときます。そのうちご飯でもおごらせましょうか）

彼女はうんざりしたようにスマートフォンを手を取って、手早く早

矢と呼ばれる男に確認のためのメッセージを飛ばした。これに対しての返信はおそらく早いだろうが、それでも即座に動くというわけにはいかない。秘密裏に処理にせよ他の業務に紛れさせて処理するにせよ、どのみちそれなりに準備というものが必要だからだ。ついでに言えば二人から頼まれたことというのもタイミングを見計らわなければ悪影響を及ぼしかねないものであるため、実質的に彼女に課せられたミッションというのは今のところないのだった。

・
・
・

なにかその部屋に対して特別な意識でもあるのか、若草色の事務服を着た彼女は扉の鍵を閉めてから廊下で伸びをし始めた。年齢にそぐわない、ぐきぐき、という音が彼女の業務の大変さを物語っている。見方を変えればそんな量の仕事をなぜひとりで担当しているのかという疑問にたどり着くが、それは逆に彼女でなければ任せられないということの証左でもあるのだろう。伸びをしていたせいで堪えるかたちになっていた空気が漏れて、甘そうな音を連れた吐息へと変わる。ここが寒い季節の外であったなら、もしかしたら白い息にうつすらと色がついていたかもしれない。

気持ちよさそうに思いきり伸びをしたあとで彼女が目を開くと、いつの間にか二メートルほど離れたところについて最近知り合った少女の姿がそこにあった。彼女は任されている職務上、一般的な社員に比べてはるかにアイドルと接する機会が多い。そして円滑に業務を遂行する上でも彼女自身の性格の上でもアイドルたちと仲良くなるのは自然なことだった。

「ちひろさん、こんなところで何してるんですか？」

「あれ、泰葉ちゃん。実はここに私専用の事務室みたいなのがあって、まあ、ここでの作業が終わったので出てきたんですよ」

「ああ、ちひろさんの姿がたまに見えなくなってたのはそういう訳でしたか」

「ええ、それよりこの階ってアイドルのみなさんが来るようなところ

じやなかったと思うんですけど、何かあったんですか?」

「えーっと、フレデリカさんのオススメに従うままに来てしまいました……」

そこまで聞くとちひろと呼ばれた女性は手を口元にもってきてくつくつと笑う。眉をすこしだけ困らせてはいるが、かえってそれが全体をやさしい笑顔に仕立て上げていた。様子を見るに似たような事例が何度かあったのかもしれない。となると泰葉の口からあがったフレデリカなる人物はなかなか食わせ者であるようだ。

ちひろの言葉と反応からすつかり自分の立ち位置を把握したのだろう、泰葉はわずかにきまり悪そうな笑顔を浮かべた。これからアイドルとして本格的に売り出されようとしている少女だ、表情にかかわらず見る者を惹きつける何かがあるにはあった。

「フレデリカちゃんはなんて言ってたんですか」

「六階にはね、私たちが知る必要のない知っておくべきことが眠ってるんだよ」と

それを聞いてちひろと呼ばれた女性は続けていた笑いを、ほんの少しだけ深めた。彼女の認識の上でも、今あった言葉とそれほど変わらない。大雑把すぎる括りとはいえ、事務仕事というものは裏方どころか建物の基礎部分のようなものであつて意識される必要すらないものだと思つている。先の言葉と違つているところをひとつ挙げるとするなら、彼女は知っておくべきとは考えていない点だった。もしこの状況のように知ってもらえて感謝までされたとすればそれは嬉しいことだが、恩着せがましく自らアピールしていくようなことではないと彼女は考えている。ちひろと呼ばれた女性は、この考え方の違いを立場の違いと解釈した。

「泰葉ちゃんはフレデリカちゃんにずいぶん期待されているみたいですね」

「どういうことですか?」

「言葉のとおりの意味ですよ。本当にただそれだけです」

泰葉の顔色はあまり納得がいったようには見えなかったが、ちひろはそれに取り合う気はなさそうだった。

咲——s a k i——

龍門瀏透華の手記

—— 八月十七日

主に清澄によつて出場を断られた全国大会を観戦しに行き、その熱が高まるのを感じると同時にある思いが去来いたしました。やはり私たちはインターハイで戦い抜けるだろうし、優勝することでさえ不可能ではないのだろう、と。その思いは各県の代表が鎬を削る一回戦から、ふつと私の胸にやってきて、二回戦、準決勝とその大きさを増し、決勝を観る段に至つては “どうやってあそこに乱入するか” などと多少はしたくないことすら考えてしまうほどでした。今はあえて優勝した高校などここには書きません。それほど私の過去に必要なこととは思えませんし、必要のある過去なら頭から消えることなどありはしませんから。

私は今、自室の机に向かつております。時刻は夜半を過ぎたあたりでしょうか。部屋にはもちろん時計もありますが、今は手元の小さな電灯しか点けていませんので時計を見るにはすこし暗すぎるといった具合です。窓から月明かりでも差し込めばさぞ風情のある情景となるのでしようが、すべての物事が思い通りにいくわけでもなく、私の部屋の窓からは見えないところで月は輝いているようです。

私自身のことについて語りましょう。兎にも角にも私のことがわからない限り、この話は後にも先にも行けません。なにかの加減で川の流れから縊れてひたすら滞留する涼しげな水たまりみたい。私の名前は龍門瀏透華。龍門瀏の名は全国的にも広まっているグループの名であり、その頂点の娘が私ということになります。ですが、私はそのようなことを語りたいのではなく、あくまで個人的な事柄にこだわろうと考えています。その個人的な事柄を語るにあたってまず

申し上げておかねばならないのは、私が麻雀の虜であるということですね。すべてはそこから始まりましたし、おそらくそこで終わるのでしょう。おそらくというのは私自身が確信を持っていないということに起因します。

私と麻雀との出会いはそれこそ記憶もはっきりしていないような幼少の頃だったのでしよう。物心ついたときにはすでに傍にありましたし、ルール自体も呑み込んでいました。ただその時点での私の麻雀に対する感情は好意的なものでもその反対でもなく、ただの遊戯のひとつだという認識でした。麻雀より興味を引く遊びなどそれこそ星の数ほどありました。虫を探して庭を駆け回るのもその一つに入るくらいだったはずです。泥んこになってカマキリを持った私が父様と母様といっしょに写真に写っているぐらいですから。つまり、麻雀と出会った初めの段階では興味などそれほど持つてはいませんでした。

強い興味を抱いたのは中学生の時分でした。人並みに年齢相応の経験をしました。それはほとんどが未熟なものに違いはありませんが、それらを経験すること自体が重要なのでしよう。小学生の頃に比べて肉体的にも成長したとの実感もありましたし、中学生のあいだは不思議な全能感が支配とはいかないまでも、脳裏をかすめることがしばしばありました。嫌味な言い方になりますが大抵のことはまず人並み以上にこなせましたし、それに驕らず努力をしたと胸を張って言うこともできると思っています。そんな折、学友から麻雀に誘われました。ルール自体は頭に入っていましたし、しばらくぶりに遊ぶとなつては勝手がわからず負けてしまいました。その場合は時間の都合もあつて、すぐさまお開きとなつてしまいましたが、私は黙っているわけにはいきませんでした。負ける、というのがひどく嫌いなのです。

“衣” と “のどっち”。麻雀に付随して私と切り離すことのできない名前。見方を変えればこの二つの名前が私を麻雀に縛り付けていると言えるかもしれませぬ。それは時に愛おしいものであり、

疎ましいものであり、妬ましいものでもありました。比率で言えば愛おしいがもつとも高いように思われます。この二つの名前のために私は本当に全力を尽くしました。力の使い方の方角性こそ違えど、たったそれだけの違いしかありません。結果に満足しているかと問われれば、素直に頷くというわけにはまいりませんが。

さてどちらから語りましょうか。どちらからでも間違っていないのかもしれませんが、そもそも語ることで自体が間違いなのかもしれません。それでも私はその必要を感じるので語るといふ選択肢を採ることといたします。しばしの間お付き合いいただければ幸いですわ。

偶発性、というのは常にべつたりと皮膚に張り付いて、いつだって爪を砥いでいるように思われます。論理的に突き詰めていけば偶発的なことなど存在しないのかもしれませんが。ですがそこまで論理を突き詰められない人間という種にあつては偶発性は宿命的なものでさえあるのでしょうか。

衣の両親は事故で身罷られています。

その全容はひどく単純なもので車による事故でした。事件性など入り込む余地のない、完全無欠な事故。何にその不合理を訴えようと返事をしてくれるものはありませんし、夜通し嘆いたところで故人は戻るものではありません。いずれそれはただの事実として処理されるでしょうが、幼い身でそれをすぐさま理解すればそれこそ異常というものに違いありません。彼女は多少の異質をこそその身に宿していますが、紛れもなく人間であり、その当時ただの幼い少女以外の何者でもありませんでした。

しかし、これは私が中学二年生になってから知った事実でした。それまで私は衣の名前はおろか、天江という家名が存在することさえ知りませんでした。学校の授業の影響で家系図を調べるまで、血のつながりのある従姉を知らなかったのです。恥じました。後悔さえしま

した。

そのあと私が父様に逆らってまで起こした行動を自己満足と呼ぶ方もいらつしやるかもしれません。衣に対するものでなく私自身に對する慰めだと糾弾されるかもしれません。私は甘んじてその全てを受け入れましょう。私は、衣を救おうとしました。亡くなられたご両親との思い出に浸り、時間を止めてしまった衣を外へと引きずり出そうとしました。衣の体軀は小さなものですので、力に任せてしまえば私の細腕でも十分に引きずり出すことは可能だったように思います。冗談はさておき、私は衣に会いにいきました。

目は口ほどにものを言う、と申します。衣の目は、排他的なものでした。十分な栄養を摂れていなかったのでしょうか、肌は荒れていましたし、落ちくぼんだ目には濃い隈。女の命である髪には艶もありませんでした。

はじめ、衣の私に対する態度はそっけないというより敵意を持っていると言つてもいいものでした。話しかけることを拒むその目に、ほんの短い間とはいえ恐怖しました。その一瞬の躊躇が衣に私の印象を決定づけたのでしよう。衣は出て行け、と一言だけつぶやきました。この言葉にどれだけの重みがあったかは直に聞いた私にしかわからないでしょう。衣の口から実際に黒い球体がこぼれたかのような錯覚さえ覚えました。結局その日は何ひとつ言葉を発することもできないまま、すぐごと引き下がることしかできませんでした。

せいぜいが三年前のことだというのにどうしてこんなにも懐かしいような感じがするのでしょうか。あのときと比べれば状況があまりにも変わっているからでしょうか。過去のこととして思い込もうとしているのかもしれない。それはそうと、一度追い返されて以降、私は衣のもとへと足繁く通いました。あのときほど習い事をうつとうしく思ったこともありません。ただやはり、通い始めのうちはまったく取り合つてはもらえませんでした。

通い続けること二月经ったころのことだったでしょうか。彼女の様子とは不釣り合いに掃除の行き届いた部屋にあるものが転がっているのを見つけました。雀牌でした。麻雀。奇異なものです。それ

はちようど私がインターネット上でそれなりの自信を身につけた時期でもありました。私は衣に雀牌について尋ねました。衣の目はずっと奥のほうにかすかな希望のようなものがちらついた気がしました。

「お前は打てるのか？」

これが衣から投げかけられた初めての言葉でした。ドラマチックなんてもものからは程遠い現実的な言葉。麻雀が打てるかどうかの確認。ですがそれは私にとっては待ち焦がれたものでした。やっとここから引きずり出せる、とそう考えました。先ほども申しましたが、そのとき私は麻雀に関してある程度の自信を得たところで、衣には負けないだろうと考えておりました。私付の執事がタイミングを見計らっては接触していたようですが、基本的に衣はひとりでいましたので麻雀の経験などないと思っておりましたから。私の見通しが甘かったことは、そのあとすぐに気付かされたのですが。

ずるり、と昏い底から手が伸びてきて、宙ぶらりんの私の足首をつかむ感覚。

翌日、私は陽も昇りきらないうちに目を覚ましました。心臓が早鐘を打っていたことをよく憶えています。寝室に一人にいるということにあれほど心細さを感じたこともありません。枕を叩いて投げて、たしか花瓶を割ってしまったはずです。心配になって駆け付けた執事に子供のような癩癩をぶつけました。謝罪こそしましたが、今でも申し訳ない気持ちは残っています。少なくとも私が取るべき行動ではありませんでした。

凄惨。私はあの夜を表現する言葉をこれ以外に思いつきません。折悪しく、その夜は月が真円を描いておりました。衣は月齢に応じてその異質の威力を変えます。満月というのはそれが最高潮に達するものでした。

TI STA
TI ST A
TI ST A
01

二〇〇八年、十一月。ニューヨーク。

「二〇〇〇ヤード離れたビルの屋上から窓ガラスぶち抜いてこめかみをズドン。しかも強化ガラスでしょ？ いったいどんな威力の銃なんスかね」

「そんな問題じゃねえだろ、この車は走行中だったんだ。この街のビルとビルの隙間を通る一瞬にも満たねえ間をたつたの一発で打ち抜くなんざまともじゃねえ、奴の仕業だろうさ」

「『ニューヨークの死神』 スか？ 冗談みたいな名前に聞こえますけどね」

「続いてのニュースです。八日未明ニューヨークで起きた自動車事故を捜査していた際、事故車両に銃殺体が見つかった事件について、NYPDは事故と死体の関連性はないと発表しました。なお自動車の窓ガラスにあった弾痕らしきものについて弊社の報道陣が問い合わせたところ、当局からの返答はありませんでした」

——ブツツ。

気分の落ち込むニュースがテレビから流れるのを聞いて、私はぐさま電源を切った。どのみちちょうど大学に行く時間だったから、きつかけとしては都合がいいといえればいいのかもしれない。ただ、あまり見ることはないテレビをたまに点けたと思えばこんなニュースに出くわすのだからため息が出る。外とは違って息は白くならなかった。もうすっかり寒くなって、コートもマフラーも手放せなく

なった。暖房の効いた教室に入れば眼鏡が曇るようにもなった。視界が真っ白になって何も見えなくなるのは困るから、あんまり好きじゃないんだけど。

驚くほど古めかしいわけでもぴかぴかに新しいわけでもないアパートのドアを閉めて、手すりのついた階段を降りる。階下につくと大家さんが廊下を箒で掃いていた。

「おや、おはようティスタちゃん、今日はまた冷えるねえ」

私はこういうとき、いつも会釈だけをして急いでその場を離れてしまふ。きつと悪い癖なのだと思う。そうするたびに大家さんが眉をひそめるのだろうと思うと、余計に気持ちが逸るのがわかった。申し訳ないとは思うけれど、そうしないわけにはいかないから。

郵便受けはアパートの玄関そばにあつて、ものによつてはいつ見ても郵便物が溢れてしまつてるところもあつた。それどころか入らないからということなのか、上に積み重ねられた郵便物がよく目に入る。もうちよつと仕事は丁寧にやればいいのにと思つたところで、何が変わるわけでもない。私がこのアパートに住むようになってからずっとこのままだ。私は他のに比べてひどく閑散とした私の部屋番号が書かれた郵便受けを開けた。それは私にとっては習慣である以上に義務に近い意味を持っている。そこには黒地に短い一文が印字された紙が、一枚だけ入つていた。

「Father has arrived.
」
神様がお見えになつています」

何度見たか知れない一文に、もうため息さえ出なかつた。ただ私はその紙をカバンにしまい込んで、努めて学校に行くことだけを考えようとした。

一歩踏み出せば人種を超えた喧噪があつて、でも互いに無関心で、ここはそういう街だ。善人も悪人もどちらとも言えない人も全部がいつしよくたになつて大きくうねる。きつとこの街はどんな人でもいることができる街だ。目の前でチェーン店のカップコーヒを投げ捨てる人を見てそう思う。多少は汚いかもしれないけど、ちよつと路地へ入ればごみ箱があるのだからそこで捨てればいいのに。たまたまそれが目について気になつた私はそれを拾つた。見てみれば路

地の奥のごみ箱はたしかにちよつと遠いところにあつた。誰にも見られないように、距離を測るためにすしだけ目に力を入れてカッパを投げる。

カコン、と小気味いい音が立って学校へ足を向けると拍手が聞こえてきて、それが自分に向けられたものだとかわかると私はそこから走って逃げた。褒められるほどのことなんて何もしていなかったはずだから。頭にあつたのはそそくさとその場からいなくなること。他のことにはちつとも気を配っていなかった。

「おいキミ！ 危ない、車来てるよ！」

そう声をかけられて左を見ると、乗用車が速度を落とすどころか逆に上げて私のほうにまっすぐ向かってきているのがわかった。呆気にとられて真つ白な時間があつて、すると私の脳がなにかの判断を下す前に別方向から衝撃があつた。誰かに突き飛ばされたのだと理解したのは、体が地面に打ちつけられた痛みとその誰かが接触したのだらう肩のあたりの痛みがじんわりと広がってからのことだった。

たぶんその人が乗っていたのだろう自転車が、ホイールをからからと回しながら路上に横倒しになっていた。状況を次第に正確に把握し始めると、心臓が張り裂けそうなほど強く脈打っているのがわかった。私を助けてくれた誰かは目の前で痛みをこらえながら立ち上がろうとしている。

そして突然、叱咤の音が飛んだ。

「どこ見て歩いてんだこのバカ！ 死にてーのかこのボケ！」

「え……、あ、あの……、ご、ごめんなさい……」

「あ、オイ！」

眼鏡を拾って走り出す。

逃げてしまうのは、きつと私の悪い癖だ。

講義を終わらせるチャイムが鳴って、教授が来週までの課題の念押しをする中を学生たちが思い思いに動き始める。次は昼休みだから

食事の相談をしている声があちこちから聞こえてきた。

(……すこしぼやける。また目悪くなつたかな)

「おまえはさあ、あーいうときはさあ、『ごめん』 じゃなくて 『ありがとう』 じゃねえ?」

段々になつている講義室の机の一段下から、ひとりの男の人が身をずいっと乗り出してきた。急だったということもあつたけれど、そもそも話しかけられることそのものに慣れていない私は、飛び上がるほど驚いた。

その人の顔を見たことがあると思つたのは一瞬で、すぐに今朝の事故寸前のところから私を助けてくれた人だと気が付いた。いろいろと衝撃的だったからはつきりと目に焼き付いている。

「はいコレ、忘れもん。おまえんだろ? ウサギくん」

本当なら私のカバンについているはずの、あまり趣味がいいとは言えないウサギくんがそこにはいて、どうやら突き飛ばされたタイミンで外れてしまつていたらしい。気恥ずかしさと驚きとでどうしたものかともごもごしていると、彼はもういちど口を開いた。

「はい、ありがとうございます、は?」

「あ、……あ、あり……がとう」

よろしい、と納得するや否や、彼は矢継ぎ早に話を展開させる。

「なんかその冴えない顔さ、この授業で見た覚えあんなーつて思つたんよね。カンシヤしろよ? 一人と一匹の命救つてやつたんだぜ?」

突然の事態に私はまだ満足に口がきけないでいた。黒のニット帽から少しだけはみ出た硬そうな質の金髪に幅の広いピアスがよく似合う彼は、またひとりで頷くと明るい調子で次の話を始めた。

「あ、俺ココの芸術学部の三年生。未来の超大物画家アーティスト・ドロワー! 覚えておいて損はないよ、……って、あー」

そういうと彼はもう一段階身を乗り出して私に顔を近づけた。私は何が何だかわからなくて咄嗟に身を引いた。ただただ驚きの連続で、なかばパニックを起こしかけているところに今度は手が伸びてきた。

彼は私の眼鏡を手を取つて、確かめるように二度三度とつるを動か

した。眼鏡を取られてしまったせいではほとんど何も見えない。目の前にある彼の顔でさえはつきりしなくなってしまうている。いま私の目に映るのは細かい模様の消えた、大雑把に色分けされただけの世界だ。

「フレーム、いつちまつてんなこれ。……突き飛ばした時か」

「た、たぶん」

「だよなア、や、悪かった。つと、弁償はカンベンな？　今月かつかつでき」

「え？　う、うん。危ないトコ助けてもらったんだし、そんな、ね？」

もともと私にそんな気はなかったから、これは素直に断れた。それに命の恩人なのは事実だし、これ以上望むというのはやりすぎというものだろう。私は彼が眼鏡のことを必要以上に責任を感じないようになんとか言葉を振り絞った。驚いたのは普段まともに働かない私の口がこの時に限ってスムーズに動いたことだ。

自分でもこんなに円滑にコミュニケーションがとれるとは思っていなかった。何しろいつも修道院の子どもたちが　「暗いから」という理由で私をいじめるターゲットに据えているくらいなのだ。もしかしたらこの人には人を安心させるような何かがあるのかもしれない。

「おまえ、笑うと可愛いじゃん」

「は!?　え？　あ？　あの、その……」

私は笑っていたの？

「あ、あの……、ご、ごめんなさい」

「あれ、もう行っちゃうの？　名前くらい教えてもバチ当たらないと思わねエ？」

「え……、な、なまえ……?」

人に名前を聞かれたのはいつぶりだろう。事務的なものを除いたらもう本当に思い出せないほど前のような気がする。

「テイ、テイスタ……。テイスタ・ロウン……」

私はもう一度だけお礼を言って彼と別れることにした。席を立つて小走りに講義室から離れる。これ以上はダメだ。地下鉄に飛び

乗って部屋に戻ることを私は選んだ。これ以上は、ダメだ。

見飽きているはずの教会は風の強い夜にぴしりと固く冷たく見えた。私は周囲に気を配って誰もいないことを確認する。ほんとうなら人が立ち入れないはずの時間に私は教会の門をくぐる。頬を突き刺すような鋭い風が吹いた。扉は、ぎい、と重い音を立ててゆっくりと開いた。

燭台に灯った最低限の明かりだけが会堂を照らして、側廊にひっそりと設置された懺悔室を奇妙に浮き上がらせている。ほとんど十年ものあいだ見続けてきたものだけれど、どうしても胸の奥が疼くのを止めることができなかった。

小さく造り込まれた懺悔室に入って扉を閉める。まるで重たい空気がそこに押し込められているみたいだった。

「……今晩は月の綺麗な夜ですね、………シスター・ミリティア」

その名前で呼ばれると、私の顔はいつも強張った。

「浮かないお顔のようですね……。仕事の話になさいますか？ それとも先に懺悔でも？」

「いえ……。大丈夫です、ファザー・ペトルス。お話をお聞かせください」

「わかりました。ではまず、ソーホーのほずれにあるウエスト・ギーン美術館をご存知ですか？ 今月の十六日からそこで近代美術の展覧会が行われます……。そこでイギリスから大量の美術品が輸送されてくるのですが……」

そこでファザー・ペトルスはひとつ息を整えた。ここからが本題ということなのだろう。私にもなんとなくの予想はできていた。何度こういった案件に触れたか覚えていない。

「それは表向き……。カムフラージュされた裏にはもう一つ。末端価格二億ドル相当のヘロイン。彼らはそれを美術品に紛れさせ、この街に運び入れるつもりです」

ため息さえ出ない。何度も何度も彼らはやって来て、たくさんの「カワイソウ」を生み出そうとする。そのたびに私の頭の中の神様が囁くの。

「標的は二人……、運んでくる者と受け取る者。英国文化保護財団会長セイン・ステイリー、そして当の美術館館長ハリス・コーネル。決行はセインの現れる十三日の火曜です……」

悪魔を。

「贖罪の十字を背負わされた彼らに永久なる安らぎを」

殺せ。

「願わくはその魂が主の御許へと導かれん事を」

殺せ。

「シスター・ミリティア、汝には神のご加護のあらん事を」

殺せ。

「エイメン」

「……………エイメン……………」

ファザー・ペトルスが懺悔室を先に出て行く。普通なら神父ではなく懺悔する者が先に出て行くのが通例だ。それは懺悔をする者も懺悔を聞く者も、どちらも互いに顔を見ないようにするため。けれど私たちは違っていた。

顔を見せない仕切り板の下、ちょうど肘掛けくらいの高さにある小さな荷物の受け渡しのための隙間に黒いファイルが置かれている。標的に関する情報が仔細に記された資料が挟まれているものだ。それを受け取ればこの小さな部屋の役目は終わり。それがたとえ本来の用途からどれだけ離れていたとしても。

修道院を訪ねると、院長先生はいつものように私を優しく迎えてくれた。迎えられたそばから子どもたちに見つかってボゴボゴにされたけれど、それもやっぱりいつものことだ。けれど子どもは加減を知らないから、パンチャキックはけっこう痛い。というかもうそろそろ寝る時間のはずなのにどうしてこんなに元気なんだろう。少しうらやましくもあったけど、自分のそんな姿がまるで想像できなくて

ちよつと笑つてしまった。すると何を勘違いしたのか、子どもたちが攻撃を激化させた。そういう意味じゃないのに。

子どもたちが寝静まるとやつと落ち着いた時間が修道院にやってくる。ニューヨークの夜はまだまだ人の活動する時間だったり、あるいは危険な匂いがし始める時間のイメージがあるけれど、私の夜に對するイメージは修道院のものの方が近い。ここで長く過ごしすぎてきたからだと思う。そしてそのほうがいいとも思う。

暖炉のパチパチという音と院長先生の出してくれた紅茶が私の気分を落ち着かせてくれた。こうやって緊張することなく話ができる人は、片手で数えて平気で余ってしまう。

「学校はどう？ もう慣れたかしら？」

「ええ、なんとか……」

「そう、あなたは本当に優秀ね……、あの子たちに爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいわ」

私は紅茶を一口飲んだ。種類はわからないけど、やさしい香りが鼻腔を通り抜ける。院長先生もカップを傾けて、ひとつ息をついた。声の調子が一段沈んだ。

「……でもあなたは、あなたたちは優秀過ぎて当たり前の幸せに手が届かなかつた……。ごく普通の暮らしを、ただの女の子でいることを神はお許しくださらなかった……」

院長先生は何かを振り払うように首を横に振って、そしておずおずと口を開いた。

「ねえ、やっぱり修道騎士ミリティアの名前は重くはないかしら……」

「いえ、私……、大丈夫です。大丈夫……」

院長先生に含むところは何も無い。事実として年齢が十に届く前から私はミリティアだったのだから、いまさら言ったところでどうしようもない。それでも純粹に心配してくれている院長先生の顔を正面から見ることはできなかった。

暖炉のほうから、からん、と軽い音がした。きつと燃え崩れたのだろう。

「……あなたはそうやって、人から遠く離れたところで生きてゆくのだ

ね……」

院長先生は独り言のように、そうつぶやいた。

「おつとそこ行く眼鏡のお嬢さん！ 似顔絵なんてどうスか、チヨー美人に描いてみせますよ？」

ここしばらくずっと変わらない風の冷たい街並みを足早に歩いてみると、突然声をかけられた。声は明らかにこちらへ向けられていて、そもそも周囲には人がほとんどいなかった。びっくりして顔を上げると、芯をやけに長く残した削り方をした鉛筆を持った昨日の人がそこにいた。外なのに椅子を置いて、カンヴァスを立てかけるための木で組まれた道具を前に置いている。ちようど風景画を描こうとしている画家のようだった。

「よっ！ おはようティスタちゃん！」

「あ、えつと……、三年の方……」

「……アーティーね、ちゃんと覚えてね……」

命の恩人に対して申し訳ないけど、あときは突然すぎて頭が混乱していたから名前を覚える余裕はちつともなかった。恩着せがましいかもしれないけれど、よく学年が出てきたものだと思う。

アーティーは口ぶりのわりにはとくに落ち込んだ様子も見せず、陽気に話を続けた。

「これからガツコ？」

「いえ……、二限で終わったので……」

「そら良かった！ ハイ、んじゃそこ座って！」

「え……、え!？」

気が付いたら言われるがままに出された椅子に腰かけていた。私からすると放水を始めたダムのように言葉を次々と投げってくるアーティーの勢いに押されたのだと思う。ひとつ気になったんだけど、これまで人と話をする機会が少なかったから意識できなかっただけで、もしかして私は断るのが下手なのだろうか。

状況も何も彼はときおり私に視線を飛ばして目の前でカンヴァスに向かつて手を動かしているのだから、私の役目ははつきりしている。言葉を思い浮かべるのも恥ずかしいけど、モデル、というやつだ。経験があるわけもないし憧れを持った覚えもない。どんな顔をすればいいのかさえわからない。

「はいはい笑ってー、引きつってるよー」

「あ、はあ……」

「いやさ、俺たまにこうやって小銭稼いでんだけどさ、こう寒いと人來なくってよ、もう」

「はあ……」

「つたく、未来の大物もラクじゃねーよ」

「そうなんですか……」

どうやらアーティーはかなり口数の多い人物であるらしい。絵画を専門にするような人は絵に取り掛かり始めたらそっちに集中するものだと思っていたけど、むしろ私が椅子に座ってからの方がしゃべるペースが上がっているような気さえする。なんというか、自分とはタイプが違いすぎて、すごいという感想しか出て来ない。

ときおり鉛筆を立てて私に向ける仕草が自然で、それが彼と絵を描くことの距離の近さを思わせた。私も小さい頃に見様見真似で同じ仕草を試してみたことがあるけど、効果はよくわからない。

「あの授業出てたってことは教育学部だろ？ やっぱ先生とか目指してんの？」

「……あ、わた……、私!？」

質問が私に飛んでくるとは考えていなくて思わず動いてしまった。それをたしなめられる。

「え、う……、うん。小さい子どもたちに勉強とか教えてあげられたらな、って」

ほんの一瞬だけ間が空いた。あれだけしゃべりながらも手を動かして続いていたアーティーが、すっかり手を止めて口を開けたままこっちを見ている。何か変なことを言ってしまったのだろうか。

「なんだ、ちゃんと自分のこと言えるんじゃない」

「え……？」

「ごめん、とか暗い顔ばつかったから大丈夫かよって思ったけどさ」

「……………」

「いいね！ 夢は語るもんじゃないとか言うやつもいるけどよ、まずは語んなきゃな！ それが叶える力にもつながるんだぜ、きつと！」

大げさに両腕を動かして、屈託なく笑う彼の姿はきつとあるべき姿だった。こんなになまっすぐ励まされたのは、ひよつとしたら初めてかもしれない。言っていることも合わせて、私はなんだかちよつと照れくさくなってしまった。

「それにさ、独りで叶えてもちよつと寂しいじゃん。周りの力が必要なときもあるじゃん？」

アーティーはいつの間にか再び手を動かしている。

「つーワケで、この大作家アーティー様が心強い味方になってしんぜよう。そして夢見るおまえの顔を、ここに証拠として描き記しておくではないか」

はっはっは、と彼はおどけてみせた。絵のモデルなんていうのは似合わないしもう一度やりたいとは思わないけど、なんだかこういうのは新鮮で、楽しかった。

修道院とはまた違う安らぎみたいなものを感じていたのかもしれない。

「おまえもう午後はヒマなの？」

「え、あ……、うん、まあ……」

「よっし！ じゃあ今日はデートな！」

「……………はっ！」

ずるずる引きずられて、気が付けば私は眼鏡屋さんでつるに花をあしらったかわいらしいフレームの眼鏡をプレゼントされていた。男の人というのはみんなこういうものなのか、それともアーティーがこういうのに手慣れているのかは私にはわからなかった。あまりの展開の早さに店員さんの声はほとんど私には届いていない。眼鏡の度

を確認してフレームを決めたらあつという間だった。

現金なもので、私は買ってもらった新しい眼鏡をつけて街を歩いている。

「いやあ今日ひとりだけ来た客にさ、体も財布も恰幅のいいババアがいてな、そりやもうベースを無視した美人に描いてやったら大喜びでガツポリよ」

「で、でもやつぱり悪い……」

「いいのいいの、どうせあぶく銭だよ」

カンヴァスを脇に抱えて、折り畳み式の椅子とカンヴァスを立てかけるためのあの道具をはみ出した状態のままカバンに突っ込んで、アーティーはなんでもなさそうに答えた。けれどやつぱり気が引けるものはあつた。プレゼントを受け取った身の上で人のお金の稼ぎ方に口なんか出せる立場ではないけれど。

というかあらためて考えると、自分が描かれたカンヴァスを持ち歩かれているというのは誰が何と言おうと恥ずかしいことに気が付いた。

「あ、あの……、それ……」

「ん？ ああせつかくだから着彩して今度わたすよ」

言われて意識が向いたのか、やけに重そうな絵を描くための道具の入ったカバンを揺さぶつた。普段から持ち運びしてるのかもしれないし、違うのかもしれない。芸術系の人とはまったく接点を持ったことがなかったから、私はただ不思議に思うことしかできなかった。

「そうだな……、イーゼル重てえし道具邪魔だし置いてくるか」
なるほど木で組み立てるあれはイーゼルというらしい。

「よーし、じゃあ次は美術館ね！ しかもタダ！ タダ見だぜー！」

道中いろんな話を投げかけてもらって、それでどうにか私も話をすることができた。私は相変わらず言葉に詰まったり、ろくな返しができなかつたけど、やつとちよつとだけ打ち解けることができたと思う。明るくてジョークもこなせる彼に、私は素直に感心していた。

地下鉄を乗り継いで少し歩くと、アーティーがうれしそうに手前の方を指した。

「じゃーん！ 到着〜！ あ、裏から入るからついてきてな」

私はそのとき目に入った文字列を信じることができずに、立ち止まって瞬きを繰り返した。平日ということもあつてか人はまばらな出入り口の上に、シンプルな字体ながら見せつけるようにその文字は踊っていた。

ウエスト・ギーノ美術館、と。

「おーい、何してんだ？ はやく来いよ！」

そう呼びかけられるまで私の全神経は目にした文字列に注がれていた。

なにかの冗談だろう、冗談であつてほしいという願いに対して美術館は何も答えてはくれなかった。冷めた血が頭の頂点から爪先までずるりと這つていく感触があつて、それはこの状況が夢でないことと直結していて、そして決定的なことを私に思い出させた。何秒ほどそこに立ち尽くしていたのかは私にはわからない。ほんの小さな可能性でしかないはずなのに、もしかが最悪の可能性をイメージさせる。足を動かすことを思い出させてくれたのはアーティーのかけてくれた声と、一際大きい心臓の跳ねる音だった。

朗らかな調子で私を待つアーティーの姿は今日知ることができた彼とまったく変わりのないものだったけど、もう無邪気な目で見ることはできなくなっていた。そしてそのことに自分で気付いた瞬間に、私はひどく傷ついた。

裏口から続く関係者通路には当たり前のように人通りがなくて、人の手で作り上げられたその空洞に靴の音が響く。ともすればまっすぐ歩くのにさえ失敗しそうになる足取りをどうにかして普通の歩き方に戻す。既に薄い吐き気を覚え始めていた。

「もう今は事故でいいんだけどさ、俺の親父がむかしココで管理主任やってたんだよ。そんでそのツテでいろいろ面倒みてもらつてんだわ」

荷物置いてくるからちよつと待つて、という彼の言葉に何も返せなくなるほどに私の頭は否定と肯定を繰り返していた。彼が自分の部屋だという一室の扉が閉まる音を私は心待ちにしていた。今は何よりもひとりの時間がありがたい。いつそのこと今日のこととはなかったことにして、ここから逃げてしまおうかと真剣に考えたくらい

だ。何も言わずにといふのはさすがに失礼だからそうはしなかったけれど。

彼が “カワイソウ” を振りまく存在なのかどうなのかの結論なんて出せるはずもないのに、私はそのことばかり考えていた。私の意識は同じところをずっとぐるぐる回っていた。身を挺してまで命を救ってくれた彼がそんな人間であるはずがないということと、状況がどうしても悪い可能性を否定させないということの間で。

「ようー、わりーな、待たせちまったか？」

荷物を置いて上着も置いてきたのだろうアーティーの姿はこぎつぱりとしたものになっていった。たしかに気が付いてみれば美術館の中は上着なんか必要ないくらいに過ごしやすい環境で、私の格好だとむしろすこし暑いほどだった。後から考えてみれば笑ってしまうくらい単純だけど、彼の姿を目にすると、さっきまで渦巻いていた疑念は意識に上らなくなっていた。

絵の鑑賞なんてしたこともない私からすると、絵描きになると夢を語っていたアーティーの着眼点や絵に対する感性は感心するほかにいものだった。美術館に展示されているからといってすべての作品が優れているわけじゃないとわかったことは大きな収穫になったと思う。私は芸術に対して高尚というイメージを持ち過ぎていたのかもしれない。もっと単純になんとなく好きや嫌いで楽しむことができれば、美術館はもっと身近なものになると学んだ。

俺はもつとすげー絵描きになってやる、なんてまっすぐ前を向いて口にできる彼に、もしかしたら私は見惚れていたのかもしれない。それは私の持つていないもので、とても眩しかった。こんなに純粹なこの人が “カワイソウ” を運んでくるわけがない。我ながら情緒不安定だとは思うけど、それでも安心できた事実にはウソはつけない。紆余曲折があつてほんの短い時間だったにせよ、ほかに思い出せないくらい楽しめたことは間違いのないところだった。ひとつのものを見て、その素直な感想を誰かと話し合うなんていう体験はあまりにも未体験すぎて、まるで見たことのない国を歩いているみたいだった。「なんだ、戻っていたのか。アーティー」

「あ、おじさん」

カツコツとひときわ耳に残る革靴の音がして、そしてアーティーを呼ぶ声が聞こえた。彼の隣にいた私もそちらに顔を向けた。彼に声がかけられた時点でイヤな予感はしていた。おじさん、と反応するのを見てその予感はさらに強まった。痩せぎすの、順当に歳を重ねた外見のその男は。

次の標的のハリス・コーネルその人だった。

不意に目に力が入る。知らず知らずのうちに指が銃把を探し求める。前提条件を含めてこの男がここにいるのは当然で、そしてアーティーの話から考えるに “おじさん” が同一人物なのも簡単に導ける。願望の話をするなら別の人物であってほしかったけど、実際に当人を目にしてしまえばもう何も言えない。私とその顔を見間違えるはずがない。あの夜に懺悔室で受け取った資料を何度確認したか知れない。